

テクノエイド (中級)研修会

優良賞

大柄な体格の患者への 福祉用具を活用した移乗負担軽減の事例

鹿教湯三才山リハビリテーションセンター

鹿教湯病院 南4階病棟

新海 洋太郎



施設概要



● 病棟種別 : 回復期リハ病棟 ベッド数 47 床

● 人員配置 : 看護師、介護職（2交代制）

● 回復期リハ病棟とは

回復期リハ病棟とは、主に脳血管疾患・運動器疾患で、回復期リハビリ入院に対象となる患者を90日～180日を上限として、リハビリや日常生活練習を中心にADLや身体機能の回復を行い、多職種で患者を支えながら社会・在宅復帰を目指す病棟

事例概要と課題

脳出血(右前頭葉皮質下出血、左側頭葉皮質下出血)後、リハビリ目的のため入院

- 60歳代 男性 185cm 90kgと大柄な体格 前医から離床が進んでいない
- 食事を含めベッド上で過ごす時間が長い 両下肢の麻痺及び筋力低下が著明
- 移乗時、前方と後方より男性2人介助

課題は？

- ① 下肢の筋力が弱く、立位保持困難
- ② 立位時の体幹の屈曲
- ③ 右手健側のプッシングが強く、麻痺側へ倒れやすい
- ④ 立位を介した方向転換のステップやピボットも困難

男性2名での介助が必要！

年齢も若いいため離床機会を増やしたい！

課題に対する対策

担当スタッフ(NS、CW、PT、OT)と共に、起居動作・移乗動作の問題点を抽出し、対策案を検討

- ① 高次脳機能障害あり、ベッドリモコンの操作は困難 ギャッチアップの操作は職員が実施
自身の力で起きやすい環境を整備
- ② ベストポジショニングバーを適切な位置に設置し立位時に体幹が伸びやすい環境を整備
- ③ プッシング軽減及びステップ練習を目的に、正しい姿勢を認識させる立位練習・重心移動の
感覚練習を実施

さらにチームで検討して

毎食時・リハビリ前後に離床・バーを使用した立ち上がり・ステップ練習の機会を増やす

動作練習と下肢の筋力向上を図る

対策実施後の結果

- ① ベストポジショニングバーを設置したことで、自身でバーを掴み端座位まで起き上がれるようになった
- ② 対策前より立位時に体幹が伸展し、安定している様子が見られた
- ③ 対策後初期の様子では下肢の動かしづらさが見られたが、日々の離床練習を行っていく毎に、**女性1人で軽介助**で行える様になった

離床が容易に出来るようになった事により、本人から「トイレに行きたい」「いつか歩きたい」などの前向きな発言も聞かれるようになった

本人の意向を確認しながら、さらなるADLとQOLの向上へ向けた支援を継続していく